第三十三回大会に参加して

米沢和彦

久しぶりに村研大会に参加。一抹の不安もあったが、たまたま蒲郡駅で最古参の服部治則先生とお会いしホッとした。そのまま先生とご一緒に宿舎に一番のり。受付後、いただいた参加者名簿をみると、予想どおり、西日本地区からの出席者はごく少数。久しぶりの参加であることと数少ない九州からの出席ということで、「これは大会印象記の番がまわってくるな」と直感し、覚悟を決める。とにかく、イヤな予感というのはよく当るもので、黒崎先生から「印象記を」といわれ、辞退する勇気も理由もなかった。

というわけで、最初から最後まで熱心に聞いたつもりであるが、よく言われるように、「村研」というのは、その名称から想像される以上に多領域にわたっており、そのさまざま視点からなされる発表を十全に理解することなど、私にはとうてい及びもつかない。したがって、印象記とはいっても、大会における発表をすべて網羅するというのではなく、私の専門領域と問題関心にてらしたごく狭い範囲に限定せざるをえないことを、まずお許しいただかねばならない。

第一番目の鷹田先生の報告は、北海道遠別町を対象地として、母村と移住村の社会的・文化的特質を解明したものである。報告では、それぞれ入植過程および入植形態の異なる三つの集落、すなわち、一、中央第一（愛知団体）、二、共栄（越前団体、統一性に欠ける）三、中央第二（個別入植）という三類型を設定した。このうち、母村との結合性をもっとも強く有する中央第一は、入植後も念仏講・弘法大師祭・秋葉神社祭等の母村の村落祭祀を存続させ、その後の変化の過程のなかでも、これらの母村の伝統は、部落共同の祭祀として伝承されている。これに対し、離散者が多く、統一性に欠けた共栄部落では、任意加入の報恩講と庚申講は形成されたが、部落共同の講集団とはなりえず、個別入植の中央第二では氏子集団以外の祭祀組織は形成されなかったことが、三類型の比較のなかで見事に分析されており、きわめて興味ぶかいものであった。ただ私自身の問題関心からいえば、ではそういう母村との信仰の連続

性の有無が、換言すれば、集落内における精神的統合のシンボルあるいはエートスの存在の有無が、こんにちの集落のくらしとどのような関連をもっているのか、端的にいえば、そのようなシンボルやエートスの存在が集落の活性化をもたらしているのか、逆に、そのようなものが存在しないことが、集落の統合機能を弱め、集落の停滞もしくは衰退の一因となっているのかどうか、――このような現代的課題を、さらに検証していただけるとすれば、この研究の意義はなおいっそう大きくなると思われる。

第二の自由報告、高橋、黒柳、柄沢三先生の「中部ジャワ村落の構造」は、中部ジャワの二つの村落（バンドウンとヒリン）の実態調査にもとづいて、農業、家族、村落生活など村落の全体構造の解明を試みたものである。このような海外調査は、言葉や習慣の違いなどから、幾多の困難がともない、その苦労は大へんなものであることが、発表から十分にうかがい知ることができた。とにかく、このような海外での調査が、村研にも登場してきたことは、今後の村研のあり方を考えるうえで、非常に喜ばしいことであるといわねばならない。

今年度の共通課題「土地利用秩序と村落の土地管理機能」、つまり「土地と村落」は、まさに「村研」固有の、かつ永遠のテーマである。それゆえその分析視角は、考え方によっては、無限であるといってよい。今年度の発表も、年代的には戦前から現代まで、その内容もきわめて広範囲にわたっている。安孫子先生の厖大な史料にもとづく綿密な分析、細谷先生のたたみかけるような歯切れのよい口調、川本先生の独特のムラ観、中田先生の漁村という視点からの鋭い分析、川島先生の実践活動に裏打ちされた問題点の指摘等、あ

りあまるご馳走を前に、あれもこれもと手を出し、結局、終わってみたら、消化不良をひきおこし、頭が混乱してまとまりがつかなくなってしまった、というのが正直な感想である。

そのなかで、あえて発言させていただくとすれば、川本先生の報告は、きわめて示唆に富むものであった。先生は、「私の話は、私の経験から把握したもので、決して理論的な究明からのものではない」と強調されながら、財界を代表する井深氏の「農業不要論」の欺瞞性や、土地流動化を防げている元凶は兼業農家であるとする通説への批判的視点を提示され、豊富な調査体験をもとに、今後のわが国の農業発展の方向について言及された。

以前から感じていることであるが、こんにち、兼業化の問題をはじめ、もはや、「農民層分解論」を軸とする分析では、経験的検証に耐えない状況が数多く生起しているのではないか、とくに、九州の農村などの分析では、誤解を恐れずにいえば、むしろ「分解論」の視点を捨てさるべきではないのか、このような考えを抱いている私には、この川本報告は知的興奮をよびさますに十分なものがあった。

それはともあれ、久しぶりに参加した「村研」は、ある意味では以前のままであった。泊まりがけで飲む酒の味はまた格別である。他に類をみない暖かさをもった独特の〝学会〟、それが「村研」であることを再確認し、満ち足りた気持ちで、三河路をあとにした。